

賀川豊彦の“共済の心”とCC共済

中田宗一郎
日本労協連

CC（コミュニティ・ケア）共済について、労協連第23回総会と高齢協連第1回総会は、位置付けを格段に高め、全組織での積極的な取り組みを開始することを提起した。

CC共済は、高齢協のスローガンである“元気な高齢者がもっと元気に！”“寝たきりにならない！しない！”を共済の心で表現する新しい協同組合の新しい共済として開発された。

既存の保険・共済が死亡時の現金給付、満期による還付中心なのに対し、生きているうちの助け合い、加入者がいちばん欲しいサービスを単なる受け身で受けるのではなく、サービス提供の専門家、ボランティアと共につくりだしていく「現物給付」の実現をめざしている。

この開発と推進を通じて、「ボランティア研究会」がこだわり続けた賀川豊彦について二点に絞って記してみたい。

一つは、賀川豊彦が説いた“共済の心”の探求が教えてくれたこと。

二つは、現代の保険・共済は「投機」に走っていて「拝金主義」を振りまく病根となっていること。賀川はこの危険性を早くに喝破していたこと。

(一) 賀川が説き、薫陶を得た先人達が追求した“共済の心”は、賀川が昭和初期に「援助が一番必要とする人達に援助が届いていない、共済掛金を病気や貧困がおこらないものとするために診療所や病院を作る事業資金にしようという呼びかけ」(本間照光：青山学報)に100%込められている。

CC共済の特徴である、コミュニティケアの確立をめざすこと。積立金を地域福祉事業所の立ち上げや人材の研修機構などに活用できるようにしようとするものと通底するのである。

(二) 開発プロジェクトチームの念願かなって過日、保険・共済についての権威である明治大学押尾直志先生から「激動する保険・共済とCC共済」と題して講演を受けることが出来た。その際、得た多くの教示のひとつが、これは思いがけないことだったが高齢協連総会での厚労省挨拶のなかでの「共済契約額は900兆円に達した」の一節に結んだ。

押尾先生の資料を参考に作った下記の表を見て頂きたい。日本の保険・共済業界の保有契約額は2700兆円、年間支払保険料・掛金は13兆円という天文学的金額に達している。国策にそって保護育成されてきた保険・共済事業は、いまビックバン政策のもと漂流を続け、運用財産が目減りも激しく、自転車操業を止めれば何が起こるか身の毛がよだつ世界にあるのだ。賀川が生きていたらなんと言うだろうか。賀川はかつて「大衆も投機を求め。投機を大衆が求めている間は大衆は救われない。新しい社会をつくることはできない。」と説いていた。

CC共済は、「多額な保険金の受け取り」のため「大口契約額」や「何本も加入する」必要はない。「最良のサービスは1つ」なのだから1人1口でよい。助け合う仲間が多ければ多いほど掛金を安くできる。

近時、生協の在り様を心配する各界からの発言や当事者からの協同の原点に立ち返ることを強調する発言をよく目にする。その際、賀川に言及することが多い。開発プロジェクトの有志でできた「ボランティア研究会」は賀川豊彦の再評価にこだわり続けてきたが、CC共済を発展させることで現代的に再生したいとの思いを強くしている。

既に推進めざす先進例が生まれる予兆を、センター事業団・兵庫高齢協・愛知高齢協・高齢協東北ブロック等が示し始めた。

CC共済が、賀川豊彦が説く“共済の心”を中心として、労協運動のファンダメンタルな仕組みとなって定着するならば、高齢協運動の第2次ブームを作りだし、労協連・高齢協連が「協同労働法時代」に切り開こうとする新しい地平のために意欲をもって活躍する人材の結集と運動推進を支える財源の見通しをも合わせて持つことになるだろうと思っている。

保険契約・共済額等（2000年）

	契約保険・共済額	受入保険料・掛金	支払保険料・共済金
保険会社	1,631(兆円)	6.92(兆円)	調査中(兆円)
共済事業	1,066	6.43	3.25